The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 『源氏物語』における「岩根の松」 : 賀歌の変容 |
| Author(s) | 白, 雨田 |
| Citation | 詞林. 2010, 48, p. 1-17 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/67618 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 『源氏物語』における「岩根の松」

## ――賀歌の変容――

白雨田

### 一　はじめに

『源氏物語』柏木巻の薫の五十日の祝に、光源氏は初めて薫と対面する。我が子ならぬ我が子を抱き、源氏が自らの宿命を嘆く。そして、次の歌を尼姿になった女三の宮に詠みかける。

誰が世にか種はまきしと人問はばいかが岩根の松はこたへむ

光源氏は罪の子薫のことを「岩根の松」に喩え、女三の宮を非難している。光源氏のこの歌がもう一度物語に響くのは、物語第三部橋姫巻の末尾で、薫が二十二歳になった秋頃のことである。薫は弁の君から実父の文反古を受け取る。中には薫の出生の秘密が明かされた上、次の歌が詠み上げられていた。

命あらばそれとも見まし人しれぬ岩根にとめし松の生ひすゑ

柏木の歌でも光源氏の歌と似た表現、「岩根にとめし松」が用いられ、薫が喩えられている。『源氏物語』で「岩根の松」が歌に詠まれたのは全四例であるが、その中の二例が薫の喩えとして詠まれている。さらにその二首の歌はいずれも薫の出生の秘密に関わる歌でもあり、「岩根の松」は薫の喩えだけではなく、薫物語の展開にも関わる重要なキーワードであるといえよう。一方、「岩根の松」の解釈に関しては、従来から混乱がみられ、難解な箇所でもある。特に光源氏の歌の下の句「いかが岩根の松は答へむ」に関して、かつて玉上琢彌氏が指摘したように[1]、「誰が答えに窮するのか」について、従来から、光源氏、女三の宮、成人した薫などが挙げられてきた[2]。なお、「岩根の松」の「岩根」については、「松の縁」とされ、その掛詞としての性質が強調されてきた。そこでは、「岩根」は「言はむ」に響かせるとの解釈がほとんどであるが[3]、一部に、「岩根」は「言はね」の掛詞であるとの注も見られる[4]。しかし、そのいずれも詳細な検討が見られず、「岩根」に関する解釈の恣意性が目立つ。

本論は、薫が二度にわたって「岩根の松」に喩えられてい

る点に注目し、『源氏物語』における「岩根の松」の特質を明らかにした上で、物語の展開に果たしている役割について、再検討を試みたい。

## 二　賀歌としての「岩根の松」

「岩根」は、根のように大地にずっしりと安定している岩という意味で、『万葉集』にすでに十数例が見られる。[5]その多くは、

岩根踏む重れる山はあらねども逢はぬ日まねみ恋わたるかも　（巻第十一・二四二六）

のように「岩根踏み」という形で詠まれ、山道の険しさを喩えている。また、

隠りづの沢たつみにある岩根ゆも通してぞ思ふ君に逢はまくは　（巻第十一・二八〇四）

のように頑丈な岩も通すほどの、恋情や思慕の強さを表現する例も見られる。

「松」については、『万葉集』に八十例ほどが見られ、樹齢の長い木であることから、聖木と見なされ、平安と長寿に関わって詠まれることが多い。しかし、万葉時代には「岩根」と「松」が詠まれる歌は見当たらない。その近い詠み方としては、

磯の上に生ふる小松の名を惜しみ人には言はず恋ひわたるかも　（巻第十一・二八七二）

や、

神さびて巌に生ふる松が根の君が心は忘れかねつも　（巻第十二・三〇六一）

などが僅かに見られる。「磯の上に生ふる小松」は序として「名」を引き起こし、「巌に生ふる松が根」は岩の頑丈さと松が根の不変のイメージと重なり、変わらぬ思いが詠まれることになる。ともに恋の景物として詠まれている。

なお、冒頭の光源氏の歌について、従来の注釈書には本歌として、次の『古今集』の二首が指摘されている。[6]

梓弓磯辺の小松誰が世にか万代かねて種を蒔きけむ　（雑歌上・九〇七）

種しあれば岩にも松は生ひにけり恋をし恋ひば逢はざらめやも　（恋歌一・五一二）

「磯辺の小松」の歌は、「「万代」の松を詠み、悠久の時間を詠む歌になっている」[7]、また、「岩にも松」の歌は、「岩」という厳しい環境を設定することで、恋の持つ強大な生命力や恋の成就の厳しさが表現されている。いずれも『万葉集』に見られる「岩根」と「松」のイメージと一致し、万葉歌の延長ともいえよう。

「岩根の松」が歌に詠まれるようになったのは、平安中期の私家集や物語が最初であったと思われる。『源氏物語』以前及び同時代と思われる歌を作者の年代順で羅列してみると、およそ以下の九首がある。

①『小町集』五十番
ものをこそいはねのまつもおもふらめちよふるすゑもかたふきにけり

②『西宮左大臣集』七番
たねしあらはいはねのまつとき、しかはこゝろにのみそまかせさりける

③『元輔集』第三巻、一五五番
人の子うませてはべる七夜
千とせふる松やなにぞも万代のいはねにおふるときはなりけり

④『恵慶集』一六八番
ぬしなきあれたるやと
うへをきしまつもいはねもかはらぬにむかしの人はいつちなるらん

⑤『拾遺抄』巻第五、賀、一七一番（同『拾遺集』巻五、賀、二七三番）
天暦のみかどの四十になりおはしましけるとし、山しな寺に金泥寿命経四十巻をかの寺にかきくやうして御巻数をそへてたてまつらせたりけるに、すはまをつくりてつるをたてて御巻数をくはせたりけり、
そのすはまのだいのしきもののあしでにあまたの歌をかけりける中に　兼盛
山しなの山のいはねに松をうゑてときはかきはにいのりをぞする

⑥『花山院歌合』一六番
祝　左　かいしう
おもふらんいはねのこまついはねどもくものうへまでおひむものとは

⑦『惟規集』二八番
わかきひとを、おやのたのめけれは、わづらふころわか葉さすいはねのまつのおひすゑをむまれゆくみのいかがたのまむ

⑧『匡衡集』二九番
おほやけどころにて、人をかたらひて
かたかりしいはねにさせる松のうへにはかなき露なむすびおかせそ

⑨『うつほ物語』「沖つ白波」巻、式部卿の宮歌
結びつる岩根の松は年を経て涼しくのみも思ほゆるかな

まず、歌語の形態からみると、全九例中、①②⑥⑦⑨などの五例が「岩根の松」という形で詠まれている。即ち、万葉歌では単独に詠まれていた「岩根」と「松」が、平安中期になると、すでに新しい歌語「岩根の松」として定着し、詠まれるようになったことが明らかになる。特に②の「たねしあらはいはねのまつとき、しかは」は、前掲の『古今集』五一二番歌を引いているにもかかわらず、元歌の「岩にも松」を意図的に「岩根の松」と詠み変えていたことからも、「岩

根の松」は当時、すでに古歌から独立した歌語として、積極的に詠まれていたことが分かる。

また、歌の内容から見ると、①②⑧は恋歌、③⑤⑥⑨は賀歌になっている。恋歌に「岩根」や「松」が登場するのは、前述した『万葉集』にすでに見られるが、賀歌には「松」は詠まれていたものの、[8]「岩根」は登場していなかった。賀歌に「岩根の松」が詠まれるようになるのは、平安中期からの新しい詠み方といえよう。なお、賀歌の詠歌時期と場面については、③は、産養の際に、⑤は、村上天皇の四十の賀に、⑥は歌合で、⑨は宮中の賀宴での詠歌である。用例が限られるものの、「岩根の松」は賀歌として広く詠まれるようになっていたことが明らかである。

なお、恋歌や賀歌のほかに、④の『恵慶集』や⑦の『惟規集』のような詠み方も見られる。『恵慶集』一六八番歌は、河原院の主である源融を偲ぶ歌群の一首である。ここの「松」と「岩根」については、『恵慶集注釈』[9]に、

「松」「岩根」は邸宅の象徴、また賀歌にはしばしば詠まれた、不変なるものの象徴。……松と岩根は邸宅の象徴であり、かつ不変なるものの象徴であるがゆえに、邸宅の主の不在を悲しみ、不変なるものと対極にある人の世の無常を歌う「よすが」となる。

と、指摘されているように、死者を悼む哀傷歌に、あえて賀歌の要素である「松」「岩根」を取り入れることで、無常と対照させ、悼む気持を深める詠み方になっている。

そして、⑦の『惟規集』の歌にも、似通った詠み方が見られる。二八番歌の詞書「わかきひとを、おやのためけれは、わづらふころ」から分かるように、この歌は惟規が「わづらふころ」に詠んだ歌であり、賀歌ではない。親と同調して、「若き人」を称える「岩根の松」が詠まれているもの、[10]決して素直に祝福しているというわけではなく、かえって親を皮肉った詠み方になっている。

平安中期には、新しい歌語「岩根の松」は主に賀歌に詠まれていたが、『恵慶集』や『惟規集』のように、「岩根の松」を賀歌ではない歌に意図的に取り入れた詠み方もみられるようになる。そのいずれも、従来「岩根」が持つ不動のイメージと、「松」が持つ不変のイメージとを重ねたものであり、思いの強さや、特に長寿平安を祝う賀歌での詠み方は、『万葉集』の歌とも通底しているだろう。

## 三　『源氏物語』の「岩根の松」

以上の考察を踏まえて、改めて『源氏物語』の「岩根の松」について検討していく。

『源氏物語』における「岩根の松」の表現は、全部で五例が見られ、歌語として使われているのは以下のＡＢＣＤ四例である。

Ａ　御消息には、

心から春まつ苑はわがやどの紅葉を風のつてにだに見よ

若き人々、御使もてはやすさまどもをかし。御返りは、この御箱の蓋に苔敷き、巌などの心ばへして、五葉の枝に、

風に散る紅葉はかろし春のいろを岩ねの松にかけてこそ見め

この岩根の松も、こまかに見れば、えならぬつくりごともなりけり。（少女③82頁）

これは少女巻で、秋好中宮の秋を賞揚する歌に、紫の上が逆に秋の軽々しさを難じる、いわゆる春秋優劣論の場面である。ここの「岩根の松」は、まさに、紅葉の「かろし」とは対極的に、不動不変の象徴として詠まれているのだろう。さらに、歌に直結する地の文「この岩根の松も、こまかに見れば、えならぬつくりごともなりけり。」より、「岩根の松」は歌語のみならず、「細工物」の名称にまで広げられて、歌の小道具の役割を果たしていることが分かる。紫の上が詠む「岩根の松」は、景物詠としては、万葉歌にすでに見られる不動不変な「岩根」の「松」と一致しており、伝統的な詠歌であるともいえよう。

B　「（中略）人よりことに数へとりたまひける今日の子の日こそ、なほうれたけれ。しばしは老を忘れてもはべるべきを」と聞こえたまふ。尚侍の君も、いとよくねびまさり、ものものしき気さへ添ひて、見るかひあるさまにまへり。

若葉さす野辺の小松をひきつれてもとの岩根をいのる今日かな

とせめておとなび聞こえたまふ。沈の折敷四つして、御若菜さまばかりまゐれり。（若菜上④57頁）

これは若菜上巻で、光源氏の四十の賀に、玉鬘が光源氏に若菜を進上した場面で詠んだ賀歌である。「岩根の松」が賀歌に定着したことは、すでに述べてきたが、ここで注目したいのは、「小松」と「岩根」とをそれぞれ、「子供」と「光源氏」に喩える詠み方である。[1] このような喩え方は、すでに前章に挙げた『うつほ物語』の歌にも見られる。

結びつる岩根の松は年を経て涼しくのみも思ほゆるかな

八月十五日夜宮中に管弦の遊びが催され、正頼の婿たちがそれぞれ加階昇進した際、式部卿の宮が詠んだ賀歌である。ここの「岩根の松」について、『新全集』頭注には、

「岩根」は、しっかり大地に根をおろした大きな岩。これに正頼家をよそえ、「松」に正頼の婿である自分たちをよそえる。正頼家の繁栄を詠んだ歌。

と注が施されている。即ち、「岩根の松」には、「岩根」のもとに小松が育てられたとして、育てる「親」と育てられた「子供」という構図も見えてくる。なお、式部卿の宮が「岩根」を権力者の正頼に喩えるのは、玉鬘の歌で「岩根」を光源氏

に喩えたのと同様に、「岩根」の持つ元来の「しっかり大地に根を下ろした大きな岩」のイメージと一致する。

次に、冒頭にも挙げた問題箇所の光源氏の歌を見てみよう。

C　「この人をばいかが見たまふや。かかる人を棄てて、背きはてたまひぬべき世にやありける。あな心憂」とおどろかしきこえたまへば、顔うち赤めておはす。

誰が世にか種はまきしと人問はばいかが岩根の松はこたへむ

あはれなり」など忍びて聞こえたまふに、御答へもなうて、ひれ臥したまへり。（柏木④324～325頁）

新生児の産養で詠まれた「岩根の松」については、すでに前章の『元輔集』で確認できた。光源氏の歌は薫の五十日に詠まれた歌であるから、賀歌の定番である「岩根の松」が詠まれるのは、ごく自然にも見える。しかし、薫は秘密の子であると暗示するこの歌は、「祝賀になっていない露骨の歌」[12]であることも自明である。賀の歌にはなっていないものの、賀の定番である「岩根の松」を取り入れる詠み方は、前章の『恵慶集』や『惟規集』ですでに確認した。光源氏の歌も、まさに同様の詠み方であろう。自らを不動不変の「岩根」として自嘲すればするほど、内心の虚しさと弱さが滲み出される。また、不義の子である薫をめでたい「松」と詠むことによる強烈な皮肉により、女三の宮を強く非難したのであろう。

最後に、同じ問題箇所である柏木の歌を見てみよう。

D　さまざま悲しきことを、陸奥国紙五六枚に、つぶつぶとあやしき鳥の跡のやうに書きて、

目の前にこの世をそむく君よりもよそにわかるる魂ぞかなしき

また、端に、「めづらしく聞きはべる二葉のほども、うしろめたう思うたまふる方はなけれど、

命あらばそれとも見まし人しれぬ岩根にとめし松の生ひすゑ」（橋姫⑤164～165頁）

これは、橋姫巻で柏木の歌によって薫の出生の秘密が明かされた場面である。薫の誕生を「めづらしく」聞いた柏木が、密かに「岩根の松」を詠みあげ、我が子の平安を寿いでいる。女三の宮の出家を悲しむ前歌に続き、柏木が自らの命も消えていくことを嘆く歌であり、賀歌にはなっていない。しかし、前章に述べてきた『恵慶集』の手法を彷彿させるように、命が消えていく無念さを深め、めでたいもの、不変なるものと対極させる詠歌手法になっている。ここで、光源氏と同じく、柏木も薫を「岩根の松」と喩えていることに注目したい。すでに論じてきたように、「岩根の松」は「親」と「子」という構造も持っており、また、BCの二例の「岩根」は、光源氏の喩えとして詠まれている。それでは、柏木が詠んだ「岩根」は、果たしてどう理解すればよいだろうか。まず、従来の注釈書を見てみたい。『萬水一露』には、

同哥　柏木存命し給は、薫は親とも御覧し又は子とも見

るへき物をと也人しれず岩ねにとめしとは密通にて女三宮のはらにやとり給ことをいへり松のおひすゑとは薫のことをさしていへる也

とあり、「岩根にとめし」は女三の宮の腹に宿ると注釈しているので、「岩根」は女三の宮であると理解しているのだろう。また、玉上琢彌の『源氏物語評釈』には、「人しれぬいはねにとめしまつ」について、

女三の宮に子を生ませたことを言う。松は岩にも生育する、……（第十巻148頁）

とあり、同じく「岩根」を女三の宮として理解している。なお、現在の注釈書には、いずれとも明示されていない。

「岩根」と「松」の持つ親子関係からは、「岩根」は「女三の宮」の喩えとしても考えられるが、女三の宮はすでに出家している事実も看過できない。次の柏木の歌と直結している「めづらしく聞きはべる二葉のほども、うしろめたう思うたまふる方はなけれど、」の一文に注目しよう。柏木が女三の宮の出家を悲しむ前歌を詠んだのち、薫のことを言及する際に、「源氏の子として育つのだから安心だけど」[13]とされている。薫の誕生後、六条院で行われた盛大な産養のことは柏木の耳にも入っていたのだろう。これで、「世間からは源氏の子として認められる」[14]と思ったのだろう。光源氏の許しを求めている柏木にとって、薫の将来を見届けることのできない不安はなお残っているが、この時点でまずひと安心したに違いない。頼りになる「親」として、「岩根にとめし松」の「岩根」はやはり光源氏と見てよいであろう。

『源氏物語』の「岩根の松」を検討してきた。Aの紫の上の詠歌以外に、Bの玉鬘の歌、Cの光源氏の歌、Dの柏木の歌に詠まれた「岩根の松」には、「親」と「子」という構図が見られる。また、三首の「岩根」はともに光源氏の喩えであると理解したほうが妥当であろう。

現在の注釈書では、「岩根の松」は薫の喩えとして定着しているものの、「岩根」については、あくまでも松の縁とされ、単なる「いはむ」（或いは「いはぬ」）の掛詞として理解されている。しかし、「岩根」が光源氏に喩えられていることを踏まえれば、「岩根の松」は単なる賀詞ではなくなり、秘密の子薫の喩えでありながら、薫と光源氏との特殊な親子関係も見えてくる歌語に変容してしまう。

次に、この「岩根の松」の変容がいかに後代の物語に影響を与えたかを検討し、源氏物語を逆照射したい。

## 四　「岩根の松」の記号化
### ―『狭衣物語』、『とはずがたり』の引用

『狭衣物語』における「岩根の松」の引用は、まず次の場面で確認できる。

「かばかり物思ふ人の生ける例には、げにしつべうぞ聞こゆる中にも、この宮の、峰の若松と、人知れず思し祝

はれけんを、ほのかに聞きつけたりし心の中のあさましさに添へても、わざとも頼もしき方も侍らじを、背き捨てさせたまひてし、その折の心惑ひは」、言ひ続けたまへるは、げに岩根の松の末も、また……。　（巻三179頁）

物語の六年目の九月に、女二の宮の法華曼荼羅供養と法華八講が嵯峨院で営まれる。その夜、狭衣が女二の宮に近づくが、宮は仏間に逃げる。右は狭衣が障子を隔てたまま積年の思いを告げる場面である。地の文「岩根の松の末」[15]については、『新全集』の頭注に、「若宮のこと」であると指摘され、前掲の光源氏の「岩根の松」の歌によるとされている。また、「若宮の出生に、罪の子薫に通じるものがあるともいえる。」とされている。

「岩根の松」という表現や、秘密の子である若宮を喩えることからは、光源氏の歌によると見てよいが、「岩根の松の末」という狭衣が我が子の未来を心配する文脈[16]からは、むしろ柏木が薫の将来を念じて詠む「岩根にとめし松の生ひ末」からの引用と考えた方がよいだろう。

また、物語の終盤の次の場面からも「岩根の松」の引用が確認できる。

尼君の、「御心地のいとど苦しきに、いとかう思し入りそ。平らかにてだに物したまはば、忍びつつは常に見たてまつりたまひてん。行く末長うこそ思さめ。あなゆゆし」とて、抱き取りたてまつるを、「なほしばしとも、えのたまはず、

行く末を頼むともなき命にてまだ岩根なる松に別るる

とあるを、見たまへらん宮の御心地、げにいかばかりかは思されつらんと思しめすに、　（巻四399～400頁）

これは飛鳥井の女君の絵日記で、女君が病気に苦しみ、姫君を最後に抱いて、その別れを悲しむ場面である。ここの「岩根なる松」について、『新全集』の頭注には、「「岩根なる松（岩根の松）」は、安定した岩に根をおろした常緑の松で、長寿を寿ぐものとして新生児の産養に詠まれることが多い」が、「この場合は幼い我が子。飛鳥井の姫君をさす。」とされている。要するに、「岩根の松」は産養の賀歌ではないが、幼い我が子の長寿を寿ぐ意になっているという主旨であろう。特に『源氏物語』との関わりについては言及されていないが、我が子と死別する場面設定や、姫君が父知らずの秘密の子であること、及び歌は後日発見された遺言歌であるなどの類似点から見ても、明らかに柏木が詠む「岩根にとめし松」の歌を踏まえた詠歌であろう。

『源氏物語』で秘密の子薫の喩えとして詠まれた「岩根の松」は、『狭衣物語』でも、同じく秘密の子として生まれた若宮や、飛鳥井の女君の喩えとして引用されていることが分かる。

ここで特に、若宮の喩えである「岩根の松」は地の文であることに注目したい。

すでに論じてきたように、「岩根の松」は平安期に入って確立した新しい歌語で、賀歌の要素として多く詠まれたが、『源氏物語』には、賀歌に詠まれる一方、秘密の子薫の喩えとしても詠まれるようになる。これら「岩根の松」のいずれも歌語として歌に詠まれていることは言うまでもない。しかし、『狭衣物語』の地の文での引用は、歌の枠を逸脱し、秘密の子を暗示する、「岩根の松」の記号性のみが抽出され、引用されている。そもそも、『源氏物語』の柏木とは違い、狭衣は密通事件の当事者でありながら、若宮の後見人でもあるので、我が子の将来を念じるところに共通しているとは言え、ここの「岩根の松」は柏木歌に滲ませた無念さはなく、形のみならず、内容においても、抽象化された「秘密の子」の記号となってしまう。

『狭衣物語』における「岩根の松」の引用には、さらに新しい形式が見られる。本章冒頭の引用部分において、狭衣の言及した「峰の若松」にも注目したい。

これは若宮が誕生した際に、皇太后宮が詠んだ、「雲居まで生ひのぼらなむ種まきし人も尋ねぬ峰の若松」の独詠歌を指している。諸注に、この歌も光源氏の「岩根の松」の詠歌によるとされ、秘密の子を暗示する歌であるとされている。さらに、皇太后宮は光源氏のように、秘密の子である「峰の若松」、即ち若宮を我が子として育てようとしているのも、明らかに『源氏物語』柏木巻における光源氏と薫の関係にぞらえた描写であろう。ただし、光源氏の自嘲の詠歌とは異なり、皇太后宮は「雲居まで生ひのぼらなむ」と、若宮の即位を予祝している[17]。つまり、歌語「峰の若松」が若宮即位を予祝する機能も備えている。また、狭衣が言う「この宮の、峰の若松と、人知れず思し祝はれけんを」(巻三179頁)や、「かの、峰の若松とかや、祝ひ置きたまひけん生ひ先の、まことに、かなひたまふやうあらば、いかなる心地しなん。…」(巻四340頁)などの心内語にも、「祝ひ」として、「峰の若松」が認識されている。倉田実氏は、「「峰の若松」は、巻二の段階では密通を暗示する記号であったが、巻三以降では、狭衣において意味がずらされ、即位の予祝として機能していく[18]」と、「峰の若松」が持つ両義性を指摘している。

歌語「峰の若松」は先例が少なく、管見の限り、『新撰和歌』巻第一、五番歌の春の歌、「春ごとにかずへこしまにひとともにおいぞしにけるみねの若松」のみとなっている。本来春の景物詠である「峰の若松」が「秘密の子の暗示」に詠まれるのは、やはり『源氏物語』からの引用であると見ていいだろう。なお、「若宮即位の予祝」の機能はまさに、『狭衣物語』の創造ともいえよう。

『狭衣物語』における「岩根の松」の引用状況をみてきた。秘密の子の喩えとして、『源氏物語』において柏木と光源氏が詠んだ「岩根の松」を引用し、享受していることが分かる。引用の形態として、飛鳥井の歌のように歌語として歌に引用

される一方、本章冒頭の「げに岩根の松の末も、」のように、記号化されて地の文に引用されるのが特徴的である。さらに、皇太后宮が詠む「峰の若松」は、『源氏物語』に光源氏が詠む「岩根の松」を踏まえながら、予祝性の機能も新たに付与した。

後代の物語における「岩根の松」の引用は、次の『とはずがたり』にも見られる。

故法皇の御物なれば、『わがにせむ』と言ひて、立ちながら見ると思ひて、夢覚めぬ。今宵かならず験あることあるらむとおぼゆるぞ。もしさもあらば、疑ふ所なき岩根の松をこそ」など仰せられしかども、……（巻三360頁）

これは、後深草院が夢から、二条が有明の子を身ごもったことを察知した場面である。ここの「岩根の松」についても、光源氏の「岩根の松」を引き、「有明の月」の子を宿すだろうの意味とされている。[19] さらに、ここの「もしさもあらば、疑ふ所なき岩根の松をこそ」について、富倉氏は、「後深草院が有明の子を自分の子とする御意がうかがわれるのである」と注を施している。[20] 兵藤氏も、「その歌（光源氏の「岩根の松」の歌―筆者注）になぞらえて、後深草院は生まれる子の素性を秘して引き取ろうといったのである。[21]」としている。ここでは、後深草院が有明の子を受け取ろうとする意志に関して、「岩根の松」と後深草院の夢との関係にも注目したい。夢の中で、二条が有明からもらった五鈷を、院が「わがにせむ」とする箇所は、『源氏物語』横笛巻の次の場面を想起させる。

「その笛はここに見るべきゆゑある物なり。かれは陽成院の御笛なり。それを、故式部卿宮のいみじきものにしたまひけるを、かの衛門督は、童よりいとことなる音を吹き出でしに感じて、かの宮の萩の宴せられける日、贈物にとらせたまへるなり。女の心は深くもたどり知らず、しかものしたるななり」などのたまひて、末の世の伝へは、またいづ方にとかは思ひまがへん、さやうに思ふなりけんかし、など思して、（横笛④367～368頁）

夕霧は、柏木遺愛の笛を落葉の宮の母御息所から贈られたが、夢の中で柏木に、この笛を伝えたい人は別人であったと告げられる。この夢の報告を受けた源氏は、「その笛はここに見るべきゆゑある物なり」と、自らが預かるべきだと主張した。「陽成院」からの笛がなぜ光源氏が預かるべき「ゆゑ」なのかに関しては、古来から議論が交わされ、確定しがたい箇所でもあったが、「血統の確認媒体[22]」や「血統・血脈の喩[23]」としての笛を光源氏が受け入れるのは、柏木の血脈である薫を我が子として受け入れる意志を示すものに違いないだろう。

一方、『とはずがたり』における後深草院の夢語り、「故法皇の御物なれば、『わがにせむ』」については、「後深草院が有明の月の胤を我が子として育てようと決心せられたことを示すものである。」と玉井幸助氏が指摘しているように、[24] 後

深草院が秘密の子を受け取る意志はすでに五鈷の夢を通して象徴的に語られている。[25] その夢語りを踏まえた上で、後深草院は二条が妊った秘密の子を薫に喩えている。胎児のことを「岩根の松」に喩えるだけでなく、自らも「岩根」と自嘲した光源氏になりすまして、『源氏物語』柏木巻の密通事件及び光源氏と薫の関係を再現しようとしているのであろう。

ここの「岩根の松」は、『狭衣物語』のように、秘密の子の記号とされている。さらに、『源氏物語』横笛巻の「横笛伝授」を踏まえた上で、有明の月の子を我が子として育てようとした場面でもある。この「岩根の松」はすでに「秘密の子」という範疇を超えて、薫物語における光源氏と薫の関係まで包摂してしまうことになる。後深草院は自らの夢を「岩根の松」でまとめ、自ら光源氏になりすましながら、二条が妊った秘密の子を薫に喩えている。

『源氏物語』の「岩根の松」は、不義の子薫の喩えとして、あくまで歌語として詠まれてきたが、『狭衣物語』から『とはずがたり』に至っては、すでに独立した「秘密の子」という記号に変容し、薫物語まで包容できるような記号になっていると言えよう。

『狭衣物語』と『とはずがたり』における「岩根の松」の引用について、いずれも秘密の子の記号であることを確認してきた。なお、「岩根の松」の引用に関しては、『小世継物語』とも関係があるとされている。[26] 次に、『小世継物語』の関係箇所を見てみよう。

## 五　平仲の歌について―『小世継物語』の改作

おとゝ北の方車にのせ給し程に。下かさねのしりとりて。御車にいるゝやうにて。へいちうよりてかきつけて。をしつけてさりにけり。おとゝは見給はす成にけり。北の方又見けるに。袖の下に。みちのくに紙をひきやりて。をしつけたるを。あやしとおもひて見れば。忍ふる人の手にて。

物を社いはねの松の岩躑躅いはねはこそあれ恋しき物を

となん有ける。車に乗し程。下かさねのしり入しは。これにこそ有けれとおほしける。又ある人の語しは。若君のかいなに書て。母にみせ奉れとて。やりたりけるとも申す。

昔せし我かねことの悲しきはいかに契りし名残なりけん

此歌こそちゝのかいなにかきて。母にみせ奉れといふに。わか君みせけり。女いみしく泣て。又かいなにかきて。返し。

現にてたれ契りけん定めなき夢路にたとるわれは我かは[27]

これは、時平の北の方になった女が子を産んで数年後、時

平の目を盗んで、平仲が北の方に歌をやる場面である。大納言国綱の若い妻が左大臣時平に奪われた話は今昔物語・十訓抄等にも見られるが、『小世継物語』のみに上記のような後日談や、平仲との「岩根の松」の和歌のやりとりが見られる。この歌については、次の『古今集』四九五番歌によるとされている。[28]

思ひいづるときはの山の岩つつじ言わねばこそあれ恋しきものを

古今集の古注で、永治二年清輔本の当該歌の勘物注記には、[29]

此歌本院大臣ノ在原北方トルヨ、車ニノスル所ニテ平仲カ彼北方ノキヌニムスヒツクル哥也者。平仲哥。将以古哥付之欤。

とあり、本院大臣藤原時平が大納言国経の北の方であった在原棟梁女を車で乗せ連れ去った際に、平仲が大納言の北の方の衣に結び付けて贈った歌であると記している。歌の初句・二句が異なる点もあるが、『小世継物語』の平仲の説話とは同じ説話と見てよいだろう。また清輔本よりも早い『朗詠江注』もほぼ同文であり、[30]

定文密通於国経大納言妻在原棟梁女、件女後為時平大臣室、生敦忠中納言、為小児時定文書其背云々

とされている。

さらに、顕昭注には、『宇治大納言物語』を引いて、この歌は平仲が引いた古歌であると論証されている。[31] 少なくとも、この段階では平仲説話の歌は古今集の歌と同文であることは確かであった。

『小世継物語』の成立に関してはなお不明であるが、早く正治年間（1199～1201）に成立した可能性があるとされていることから、『古今集』の歌「思ひいづるときはの山」を『小世継物語』では「物をこそ岩根の松」に改作してしまったと考えられる。[32] 契沖の『古今余材抄』には、[33]

宇治大納言もの語に本院左大臣の国経卿の妻を取て帰り給ふ時、車におしのするほどに平仲が彼北方の袖の下にみちのく紙にかきていれたる哥。

物をこそいはねのもりのいはつゝじいはねばこそあれこひしきものを

今の哥は古哥にてかくは平仲が引なほしけるなるべし

とあり、平仲が古歌を引き直したとの指摘と同じ趣旨であろう。

それでは、このような歌の改作は、『小世継物語』にどのような効果をもたらしたのだろう。

これまで論じてきたように、「岩根の松」は、『源氏物語』以降の物語においては、「秘密の子」という代名詞に変容してしまう。しかし、問題になるのは、『小世継物語』からは、平仲と在原棟梁女との密通は確認できるものの、若君が秘密の子であることは物語では確認できないということである。[34] ただ、その改作の効果の片鱗が窺えるのは、次の『実隆公記』

においてである。

文明十六年十一月八日条

八日壬辰天晴、宗綱卿番代可祇候由示送之間、自晩頭参内、今夜黒戸、いはねの松と云絵於御前一見、国経大納言、有原氏女、本院左大臣時平公正月三日引物載車帰事在之、平貞文初密通之女也云々、有其興之間記之、今日故障之旨觸政行不参室町殿、……

歌語の「岩根の松」、及び平仲と有原氏女の後日談の記述などから分かるように、この絵物語は、明らかに『小世継物語』の影響によるものであろう。ただし、日記には「平貞文初密通之女也云々、有其興之間記之」とあり、密通事件については記述してあるものの、若君が密通の子であることについては述べられていなかった。ここで、その絵物語の題である「いはねの松」に注目し、当時すでに広く流布していた連歌の入門書『連珠合璧集』[35]における「岩根の松」の解釈を確認してみよう。

柏木トアラバ、

森三笠山　葉もりの神　ならしがほなる　末あへる源

神のしるし同　恋しぬる同　衛門督事　玉　ならの葉

ながめ　この手　うちつけなることの葉源　岩ねの松

同

柏木の哥は、衛門督の身まかりて後、夕霧の大将の一條の御息所によめる也。岩ねの松の事は其巻にはあれども、かほる大将の事にて別の事也。されども、かしは木とあれば、岩ねの松などを付きたれる、是は木與木なれば、さのみちがはざる事にや。

とあり、「岩根の松」が「柏木」の寄合として挙げられた上で、薫を指すことも説明されている。即ちこの時代に、「岩根の松」は源氏詞として、また薫の代名詞としてすでに広く認知されていたことが分かる。

「岩根の松」という題につけられたことにより、平仲の密通物語そのものよりもむしろ、物語背後にある、若君が平仲の秘密の子であるという可能性が示唆されているのである。

## 六　おわりに

以上、歌語「岩根の松」の性質、また『源氏物語』における「岩根の松」の応用、及び後代の物語における「岩根の松」の引用について検討してきた。

平安中期から詠まれるようになった新しい歌語「岩根の松」は、従来賀歌に多く詠まれ、賀歌の定番でもあった。しかし、『源氏物語』で秘密の子である薫の喩えとして詠まれたことが、後代の物語に大きく影響を与えていた。『狭衣物語』では、「秘密の子」の代名詞となり、狭衣の若君や飛鳥井の姫君に喩えられている。さらに、歌の枠を超えて、地の文で引用され、完全に記号化されていた。『とはずがたり』には、その「秘密の子」の記号性を継承するだけではなく、「岩根の松」に

包摂された薫物語、特に光源氏と薫との人間関係まで継承し、物語に再現しようとしている。なお、『小世継物語』においては、平仲が引いている古歌をあえて「岩根の松」に改作したことにより、物語に明記されていなかったにもかかわらず、読者に若君が平仲の秘密の子である可能性まで示唆されている。

なお、「岩根」の解釈に関しては、冒頭にも言及したように、従来、「言はむ」あるいは「言はね」の掛詞であるとのみ解釈されてきた。しかし一方、これまで検討してきたように、「岩根の松」が「親」と「子」という構図をもつことも明らかになっている。「松」は新生児や子供の喩えであるのに対して、「岩根」は、『うつほ物語』の正頼、『源氏物語』の光源氏のように、頼りになる権力者の親に喩えられている。後代の物語においても同じく、『狭衣物語』の一品宮や皇太后宮、『とはずがたり』の後深草院、『小世継物語』の時平などそれぞれに喩えられ、その底流にあるのは、万葉時代に詠まれてきた「岩根」がもつ不動不変なイメージであろう。

本稿は、主に物語において、「岩根の松」の特性及び変容について検討してきたが、和歌史での受容状況にも検討の余地がなお残っている。今回論じきれなかった掛詞の問題に関しては、稿を改めて論じたい。

※本稿における本文の引用は、『源氏物語』『狭衣物語』『とはずがたり』は新編日本古典文学全集、和歌は新編国歌大観に拠った。なお、句読点や清濁、表記などについて私に改めたところがある。

注

(1)玉上琢彌『源氏物語評釈』第八巻（角川書店、一九六七年三月）

「いかゞ岩根の松はこたへむ」。「岩根」に「言はむ」をひびかす。「いかゞ言はむ」どのように言おう。答えに窮するのだ。誰が答えに窮するのか。

源氏が（吉沢博士）、女三の宮が（池田博士）、当事者として考えられる。またこの赤児の成人した薫（山岸博士）も考えられる。

歌に続けて「あはれなり」と言ったところからは、薫と見るのがよいであろうか。

(2)女三の宮と注釈しているのは、

・武笠三校註『源氏物語』（有朋堂文庫　有朋堂書店、一九一四年七月）

此子は誰の胤ぞと問はれたらば其方は何と答ふるぞ。

・金子元臣著『源氏物語新解』（明治書院、一九二八年二月）

たが世にか……誰がこの子の父かと人が聞いたら貴女は何と答へるでせうとの意。

・池田亀鑑著、日本古典全書『源氏物語』頭注（朝日新聞社、一九五二年三月）

これは一体どなたのお子さんかと人が尋ねたらどうお答へになりますか。

光源氏と注釈しているのは、

・吉沢義則著『対校源氏物語新釈』（平凡社、一九三八年十月）

たが世にか……いつのまにかうした子が出来たのかと人に聞かれたら、どう答へたものでせう。私には分りかねます。

なお、日本古典文学大系『源氏物語』以降、ほとんどの注釈書で、薫に統一されるようになる。

（3）日本古典文学大系『源氏物語』（以下『旧大系』）、新潮日本古典集成『源氏物語』（以下『新潮集成』）、新編日本古典文学全集『源氏物語』（以下『新全集』）注に見られる。なお新日本古典文学大系『源氏物語』（以下『新大系』）は「「岩」に「言は（む）」をかける」とされている。

（4）『源氏物語の鑑賞と基礎知識』後藤祥子注（至文堂、二〇〇一年三月）

「岩根」は、木の根のように地中にほとんど埋まっている大きな岩。岩根に生えている古い松は、王朝の賀歌では恒久なものの象徴。ここでは若君を喩え、「言はね」を掛けている。

（5）片桐洋一著『歌枕歌ことば辞典　増訂版』（笠間書院、一九九九年）、青木生子監修『万葉ことば事典』（奥田俊博注）（大和書房、二〇〇一年）

（6）『一葉抄』（井爪康之編、源氏物語古注集成第9巻『一葉抄』桜楓社、一九八四年三月）

あつさ弓いそへの小松たか世にか万代かけてたねをまきけん

詞をとれる歟又は恋をし恋はあハさらめやもといふ哥の心もあるにや恋ちゆへかゝる理にもあるへし

今川範政著『源氏物語提要』（稲賀敬二編、源氏物語古注集成2『今川範政源氏物語提要』桜楓社、一九七八年一一月）

かくよみ給ふ心は、松をわかきみによそへ、たかまきし種にかとよみかけ給へり。女三の宮は此御歌を聞給ひて、かほうちあかめ給ふ。今の歌は、古今集に、

種しあれは岩にも松は生にけり恋をし恋のあはさらめやは、

此歌を本歌にとれる成へし。又此心を後京極摂政、

種しあれはほとけの身ともなりぬへし岩にも松はおひけるものを、

（7）片桐洋一著『古今和歌集全注釈』（講談社、一九九八年）

（8）『万葉集』に「松」が賀歌として詠まれた例は、大伴家持の「たまきはる命は知らず松が枝を結ぶ心は長くとそ思ふ」（巻第六・一〇四三）がある。

（9）川村晃生・松本真奈美著『恵慶集注釈』（私家集注釈叢刊16、貴重本刊行会、二〇〇六年）

（10）『惟規集』については、南波浩「紫式部の意識基体」（『同志社国文学』五、一九七一年三月）の以下の解釈が参考になる。

この大要は、「まだ年少の人を、父親為時が私に（この人は将来頼りになる人だから、お前も頼りにせよと、つねに、）頼りに思わせたので、てこずっていた頃に詠んだ歌―若葉の出たばかりの、岩根に生えた小松（まだ幼少の人）の生い先を、私自身これから成長し世に出てゆく身として、どうして今から頼りにしておれようか」というような意であろうと思われる。父親が頼りに思わせようとした「わかき人」こそ、紫式部であったのではないか。父為時が式部の利発聡明さを評価していて、折にふれては、「この子は将来えらいものになるぞ。お前もこれから相談相手として頼りにせよ」と言っ

ていたものであろう。その「わかき人」を惟規は、「若葉さす岩根の松」と詠んでいる点から思うと、惟規より年少者であったろう。すなわち、やはり惟規が兄で、式部は妹であったと推察される。

(11)『新全集』頭注（小学館、一九九六年）。
正月の子の日に、小松を引き長寿を祈る風習があったので、その「小松」に「子供」の意をかよわせ、「引き」は「小松」の縁語。「もとの岩根」に源氏を喩える。前の源氏の言葉「今日の子の日こそ…」に対応させる。

(12)『新大系』注（岩波書店、一九九六年）。

(13)『新潮集成』頭注（新潮社、一九八二年）。

(14)『新全集』頭注。

(15)「岩根の松の末」一文に関して、異本文の多い箇所でもある。『旧大系』には、「岩根の松の末も傾きぬべし」とされた上、『小町集』五十番歌「ものをこそいはねのまつもおもふらめちよふるすゑもかたふきにけり」によると注を施している。中田剛直編『校本狭衣物語』によると、『旧大系』と同文の伝本はほかに、為家本、吉田本、鎌倉本、蓮空本、為相本、竜谷本、中田本、京大五冊本など多数あるが、最も古態をもつ深川本を尊重する理由で、『新全集』本文に依拠し、論を進めていくことにする。

(16)『新全集』頭注に「若宮が後一条帝の養子になって次の東宮となる可能性はなくなる」とされている。

(17)『新潮集成』注に「雲居に届くまでも—帝位に即くまでに—ぐんぐん成長して昇りつめてほしいものよ」とされている。

(18) 倉田実「『狭衣物語』の若宮をめぐって—『源氏物語』引用からの創造—」（『論叢狭衣物語3引用と想像力』新典社、二〇〇二年）。なお、氏の使用テキストは『新潮集成』本である。

(19)清水好子「古典としての源氏物語—とはずがたり執筆の意味—」（『古代文学論叢』巻七、一九七九年十二月）、西沢正史「『とはずがたり』における『源氏物語』」（『女流日記文学講座』第5巻、勉誠社、一九九〇年五月）

(20) 冨倉徳次郎訳『とはずがたり』注（筑摩書房、一九六九年）。
注19清水好子氏も言及し、その主旨に賛同。

(21) 兵藤裕己「『とはずがたり』の『源氏物語』引用—イデオロギーとしての文化資源—」（『国語と国文学』第九二四号、二〇〇〇年十一月）

(22) 深沢三千男「横笛巻ところどころ」（『人文論集』一八—三、一九八三年三月）

(23) 小嶋菜温子『源氏物語批評』（有精堂、一九九五年）、初出は、「柏木の笛」（『むらさき』第二三号、一九八六年七月）

(24) 玉井幸助著『問はず語り研究大成』巻三注（明治書院、一九七一年四月）

(25)『新全集』注によると、妊娠の予兆「扇に油壺の夢」とともに、象徴的な夢である。銀の油壺に関しては「胎児の象徴とも考えられる」とされるので、五鈷も同様に胎児の象徴と考えられるだろう。

(26) 玉井幸助著『問はず語り研究大成』（明治書院、一九七一年四月）では、『とはずがたり』の「岩根の松」に関して、次のように論じられている。
ここは世継物語（続群雑部九五一）の次の話と関係がある。昔大納言国綱（今昔物語・十訓抄等には国経とある。それが正しい）という老人が若く美しい妻を左大臣時平に譲って後

悔し一生悲しんで世を終った。この若妻はかねて色好みの平中とも関係していたのであるが、時平に連れ去られる時、平中が悲しんで、

物をこそいはねの松の岩つつじいはねばこそあれ恋しきものを

という歌を送った。一説にこの歌を送ったのは数年後のことで、時平の若君、実は平中の子で時平につれ去られた後に生まれたので時平の子として育てられている若君が遊んでいるのをこっそり呼んでその腕に書きつけて、母に見せ奉れといって送ったとも伝えている。

この話は谷崎潤一郎の「少将滋幹の母」の粉本となったものである。

氏のいう「一説」はなお不明である。

(27)『続群書類従』第三十二輯下、巻第九五一雑部（続群書類従完成会、一九〇二年）

(28) 白石美鈴「『世継物語』注釈（七）」（『日本女子大学紀要』五三巻、二〇〇四年三月）

(29) 日本古典文学会編『清輔本古今和歌集』（日本古典文学刊行会、一九七三年四月）

(30) 伊藤正義、黒田彰、三木雅博編著『和漢朗詠集古注釈集成』第一巻（大学堂書店、一九八九年）

(31) 荒木浩「『宇治大納言物語』享受史上の分岐―顕昭所引の佚文をめぐって」（『説林』三六、一九八八年二月）。なお、本論は氏の『小世継物語』第五六段に関する論証の示唆によるところが大きい。

(32) 薗部幹生「『世継物語』正治年間成立の可能性について」（『論輯』第九号、一九八一年二月）、白石美鈴「今昔物語集巻22第8話及び世継物語第五六話の生成」（『国文目白』巻三三、一九九四年一月）

(33) 築島裕ほか編集『古今余材抄』（『契沖全集』第八巻、岩波書店、一九七三年）

(34)『実隆公記』文明十六年十一月八日条（高橋隆三編『実隆公記』巻一下、続群書類従完成会、一九三一年八月）

(35)『連歌論集（一）中世の文学』（三弥井書店、一九七二年）

（はく・うでん　本学大学院博士後期課程）